

音楽文化の伝承と変容

薛 羅 軍

はじめに

社会学や文化人類学の用語として「socialization」すなわち「社会化」ある。「文化化 enculturation」はほぼ同じ意味の用語である。ただし、「社会化」の方がやや広い概念であり、文化的な事柄を強調する時「文化化」を用いるようである。『社会学事典』は「社会化」について「人間は社会によって産み出される。それと同時に、その人間が社会を産み出す。この双方向的な過程を社会化と呼ぶ」と述べている。また『文化人類学事典』には、「文化システムとの関りでは、社会化は、人間が文化を内面化して身につけること、すなわち文化化 (enculturation) として進行する。とりわけその文化の価値を内面化し、道徳を形成する道徳的社会化の過程が重要である」とある。またこの「文化化」において重要な「伝播と変容」ということについては、例えば『岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽』3「伝播と変容」において詳しく論じられている。こうしたことを踏まえて簡潔に言うならば、人間がある社会のメンバーとして成長して行く過程で、その社会の中での風俗習慣を身につけて行くことが「文化化」だと言える。この考え方を援用すれば、侗族琵琶歌は文化化の機能を持っており、侗族文化を継続的に維持して行く上で重要な手段であると考えることができる。

侗族は文字を持たない民族である。そのため、その民族文化を伝承し、次世代を教育して行くという課題は、主に口承によって行われてきた。歌唱手段を用いる方が言語手段を用いるよりもはるかに印象的であり、音楽形式の教授学習を通して行われる教育は、青年にとっても最適の手段であると思われる。このため、侗族の琵琶演奏家兼歌手たちは、よく人生哲学や処世訓を題材にして琵琶歌を作り、青年が青春を大切にし、生活を愛し、熱心に労働するような教育的内容を歌いあげている。この種の伝統文化の継承方法は、相当に古い時代から行なわれてきた。

筆者は本誌『文化科学研究』Vol. 14 No. 1 (2002) 所収「中国の少数民族・侗族の音楽 音楽の分類と侗族歌師の社会的地位について」、及び Vol. 14 No. 2 (2002) 所収「中国の少数民族・侗族の祖母神『菩薩』」において、侗族の音楽文化に関する報告を行った。また中京大学文化科学研究所叢書6『楽は楽なり 中国音楽論集』所収「中国の少数民族・瑶族の祭りと文化 対歌と挑花に関する実地調査報告」では瑶族の音楽文化についても論じた。ここではそれらを踏まえた上で、少数民族文化の研究のあり方も考察しつつ、侗族の音楽文化に関する従来の研究・調査の概要と今後の展開について報告したいと思う。

一、方法としての音楽学

音楽学は実践性の非常に強い学問である。特に民族音楽学は人類学・社会学・民族学などの分野と同様に、研究方法では実地調査を重視し、自らの手で良質の資料を多く収集することが評価される。民族音楽学者は音楽資料の調査と収集を研究者としての重要な活動と見なしており、現地に深く入って調査を行い、音楽資料を直接採集するのである。

フィールドワークは、その名称から考えるに、音楽学者が民間に深く入り込み、社会へ向かうこと、具体的には研究の対象である音楽に対して、深く詳細な調査を行うことを提唱している。フィールドワークを採用するかどうかは、音楽学研究の対象と音楽学者自身の資質によって決定される。民族音楽学研究は現在でも民間伝承と音楽事象を出発点としている。文献中に保存されている音楽資料は、過去の人々が調査・収集・記録したものである。それらに見られる歴史的な音楽事象は二次的な歴史資料であり、現代人が収集した音楽資料も、研究者本人が調査して得たものでない限りは二次的資料である。歴史的な文献資料や他者の調査した資料に基づいても音楽学研究を進めることはできる。なぜならどんな研究者もあらゆる民族、あらゆる地域の音楽事象を全て調査することなどできないからである。他者の調査資料を借用するものやむを得ない。しかし、優秀な研究者ならこうした資料に満足せず、さらにいくつかの音楽事象に対してテーマ調査を行うことであろう。テーマ調査によって研究者は一次資料を獲得できるだけでなく、さらに重要なことにその民族の音楽生活についての感性や知識がさらに増すからである。こうした感性や知識は、自分や他者の調査で得た資料を分析、総括する際に極めて重要である。音楽は生きた文化現象の一種であるため、とりわけ民族心理や多くの民族特有の事物については、身をもってそこに行くことでこそ初めて感じ取ることができる。その意味でフィールドワークは民族音楽学研究において最も信頼できる研究方法だと言える。それは忠実で信頼に足る資料を獲得できるだけでなく、先人の調査資料の不足を修正補充することができるからである。

いわゆる研究順序とは研究の際の具体的な手順を指す。音楽学研究の場合は、一般的には以下のような段階を経ねばならない。

1. テーマを設定し、計画を立てる。

どんな音楽学者でも、研究は全くのゼロから始まるのではない。最初はみな多かれ少なかれ一定の資料を確保していて、さらにある資料の価値に興味を示している。音楽が表現する範囲は相当に広いので、マクロの角度であれミクロの角度であれ、研究者はその研究範囲を具体的に絞って問題を提出し、そこからある研究テーマを決定し、このテーマに関連する資料について考察をし、ある仮説を提示しなければならない。もしテーマが確定していないと、将来の研究への見通しが立たないので、研究者は十分な確信を持って研究することができない。一旦テーマを設定したら、すぐに研究計画を立てて措置を採らなければならない。それはどのようにテーマを詰めるかによって、テーマの需要に基づいた資料収集の方法が決まるということである。それは文献で探すか現地調査を行うか、ということでもある。また理論上の問題を解決するために文献を読み、先人がこの問題の研究でどのような成

果を収めているかを収集する、ということでもある。これら全てが研究の基本的な方法なのである。

2. 資料の収集、整理

研究を行う上で、資料を十分収集することは研究の基本条件であり、また研究の質と量を高める重要な手がかりとなる。音楽学研究においても資料は詳しい程良い。歴史的文献資料、実際の調査資料、他の研究成果について熟知すべきで、一知半解というのでは困る。同時に、詳細な資料を持っているということを前提に、手に入れた資料に対して整理と分析を進め、最も価値のある資料を抽出することが、研究を行う際の論拠となる。必要であれば、用いた資料をまとめ、参考資料として添付することも必要である。

すでに、フィールドワークは音楽学に基本的研究方法の一つであると述べた。この方法をよりよく実施し、所期の効果を収めるためにも、音楽学調査要項を作成することは、極めて重要である。調査要項をどのように定めるかは、調査規模や調査内容を見てから決めなければならない。もし参加するのが大規模な音楽誌のための展望調査なら、音楽の全ての範囲や対象にわたって要項を作成しなければならないし、少なくとも調査する項目を詳細に列挙し、同時に重要なところを示さなければならない。もしそれがある音楽事象についてのテーマ調査ならば、調査項目よりもさらに詳細な調査要項を作らなければならない。

音楽学調査要項は音楽学調査の青写真であり、調査行動を決定する準則なので、あらかじめ十分に重視しなければならない。ある民族地域に到着した時、もしも単に旅行や他の仕事で来ていて、偶然その特殊な風俗に出くわし、興味を引かれたのならば、ざっと見る形で調査を行い、戻ってから旅行記の類の文章を一編書けばそれで許されることもあろう。しかし一介の音楽学研究者として、その仕事が自覚的なもので、民族地区に赴く目的が明確で、しかも出発前に詳細な調査要項を作成してあるならば、その心構えも十分なものとなる。従って彼が音楽調査を展開する目的・方式・方法は、旅行者とは根本的に異なるのである。

音楽調査の立案では、まず調査の項目を確定しなければならない。またこれらの項目では音楽学研究の対象と範囲を正確に具体的に記さなければならない。次に調査の項目を列記する。

(一)、自然環境

- 1-1 地理位置
- 1-2 地形地貌、気候類型
- 1-3 資源、物産

(二)、民族の構成

- 2-1 地域の範囲及び構成
- 2-2 人口、民族の分布、民族言語と文字
- 2-3 民族の歴史

(三)、経済文化環境

- 3-1 居住方式及び環境の選択

- 3 - 2 生産方式及び経済類型
- 3 - 3 民俗 (祭り、宗教、冠婚葬祭等)
- 3 - 4 教育との関連の文芸 (民間文学、美術、舞踊、演劇等)

(四)、音楽の呼称

- 4 - 1 現地語、他言語、旧称、俗称
- 4 - 2 呼称の源流
 - 4 - 2 - 1 源流形成の歴史
 - 4 - 2 - 2 源流形成の過程
- 4 - 3 1 分布の地域範囲
 - 4 - 3 - 2 分布の特徴
- 4 - 4 1 伝承の形式
 - 4 - 4 - 2 伝承の社会的条件
 - 4 - 4 - 3 伝承の方法
 - 4 - 4 - 4 伝承者と被伝承者の関係

(五)、音楽活動

- 5 - 5 - 1 音楽活動の時間、場所
- 5 - 5 - 2 音楽活動の原因、目的、機能
- 5 - 5 - 3 音楽活動の群体の心理
- 5 - 5 - 4 演出の場所、服装

(六)、楽器

- 6 - 1 楽器の名称及び楽器の歴史
- 6 - 2 楽器演奏の方式と技術
- 6 - 3 楽器の開放弦、音量
- 6 - 4 特定の楽器と他の楽器との関係
- 6 - 5 楽譜の形式 (五線譜、数字譜、他の記譜法)

(七)、この地区の音楽文化と他の地区音楽文化の関係

- 7 - 1 相互間の音楽文化の内容と形式の関連
- 7 - 2 相互間の音楽文化と歴史の関連
- 7 - 3 相互間の音楽文化交流の文化背景

以上、「音楽学調査要項」に関する項目を列挙したが、これは音楽事象の全てではない。各人が主観的あるいは客観的の必要があれば、より詳細な項目を列記しなければならない。調査を行う前に立てた理論的・物質的準備、さらには調査方法やテーマ提示の方法、調査に使用する道具 (筆記・録音・録画など) まで考慮に入れる必要がある。

二、音楽学の対象としての音楽

音楽学の研究対象としての音楽について常に重視すべきは、それが常に伝播と変容を繰り返していることである。つまり、調査・研究の対象としての音楽が持つ最大の特徴は、それが「生きている」ということである。音楽は、ある民族の中で現在でも生きている。その音楽は自民族の言語で歌われ、自民族の生活地域で流行し、その文化環境内で成長する。外来のものの影響を受けた時は変化することもある。そのため現地での音楽資料の調査・収集・整理を音楽研究の立脚点としなければならない。現在の音楽は豊富かつ多彩であるため、研究領域は非常に広範なものになっている。音楽事象を社会生活や文化の領域全般に至るまで展開するなら、音楽学の研究領域もそれに応じて拡大せねばならない。

音楽は人類社会の誕生に伴って生まれ、人類社会の発展に伴い発展した。各民族において、その置かれた自然環境や産業と生活スタイルの違いから、様々な習慣・信仰や嗜好を形成し、様々な音楽現象が現れる。音楽は一度形成されると、民族や地域の中で相対的に安定性を保つが、ほとんどの場合、社会生活の変化に伴って変化する。豊かに展開するものもあれば、萎縮して消滅するものもある。いずれも変化音楽の事象においてよく見られる現象である。つまり現代生活の中で保存されている音楽はまた、非常に複雑な変化を経ていると言えよう。

多くの民族民間音楽は主に口伝によって伝承されたものである。それは各民族の生活に対して歴史的な影響を及ぼす。こうした影響は物質面に現れるだけでなく、さらに重要なことに、民族の心理要素が形成される際に強く現れる。音楽の伝承は言葉抜きには考えられない。各民族の神話・伝説・説話・民歌・叙事歌といった、音楽事象に含まれる口述文学の伝承だけが言葉を欠かせないのではなく、生産・生活習慣も補助としての言葉を除外できないのである。例えば生活習慣の伝授・飲食や服装の製作・宗教行為の伝習などは行為を主体としているが、言葉の補助機能が欠かせない。

三、民族史・民族誌と音楽

音楽は一旦生まれると、口述の方式で代々伝承され、次第に口承音楽を形成する。中国西南地方の少数民族の間では、多くの「創世記」神話が聞き語りによって伝えられ、現在まで保存されている。民族の祝祭日の集まりや冠婚葬祭儀式において、語り手や巫師は「創世記」を歌い、それをその民族の歴史規範としているのである。ある民族は「創世記」の伝承を失わないよう、さらに若者を組織して専門的に歌い方を学ばせている。侗族地区では、多くの村で婚礼儀式・子供の出産・老人の死・家の新築・鼓楼の建立・新居への移転・娘たちの棉花の種蒔き及び伝統的祝祭日などの場合には、必ず自分の祖先の由来に想いをさせる活動を行い、その途中で親族中の年長者や有名な歌手に古歌「侗族の祖先はどこから来たか」を歌ってもらおう。こうした活動を侗語で「dousha」と言う。その歌いが終わった後に、その他の活動を再開するのである。こうした活動を繰り返す目的は、一つには祖先に対する思慕と尊敬を示すことであり、さらには子孫末代まで自分たちの祖先の創業の苦しみを忘れ

させないことである。こうした事象は、文字を持たない民族の間で普遍的に行っていたもので、口述による歴史伝承の一種独特な方法と言える。音楽は民族歴史の保存の役割を果たしているのである。

文字を持たない侗族は自民族の歴史と民族誌を音楽（琵琶歌）で伝えている。現在出版されている『侗族簡史』、『侗族文学史』、『侗族民間文学史』、『侗族史詩——起源之歌』、『侗族大歌琵琶歌』等は全部漢文である。しかし、現在、村で伝えられている民族史と民族誌は全て口伝によるもので、そこで侗族琵琶歌手は大きな役割を果たしている。

四、侗族琵琶と琵琶歌の研究概況

中国侗族琵琶歌の研究は1958年に学者趙洪滔が湖南省通道侗族自治県の音楽について調査したことに端を発する。侗族琵琶歌もその調査に含まれている。その後、1966年から1976年までの「文化大革命」において、少数音楽の研究は中断された。1979年以降になって侗族の音楽についての書物や楽譜が出版されるようになった。1986年に袁応昌・毛継増の編著で出版された『中国少数民族楽器誌』の中で侗族琵琶が紹介されている。1984年中国芸術研究院音楽研究所編の『中国音楽詞典』の中でも侗族琵琶の紹介がある。そして『中国少数民族芸術詞典』、『貴州少数民族楽器100種』、『貴州音楽文集』、『侗族通覧』などの中では侗族琵琶歌の写真も掲載されている。侗族各地の琵琶には統一された形態はないが、研究者たちの写真や描画を見るにいずれも大同小異である。

侗族琵琶歌についての研究には、まず1958年の趙洪滔氏による琵琶歌の簡単な紹介がある。1987年広西壮族自治区三江侗族自治县により編集出版された『侗族琵琶歌』には歌詞だけが収録されている。この本の特徴は、標準中国語による漢字表記で記述されていると同時に、漢字を当てた侗音の歌詞もついている点にある。内容は、賛美歌（賛美鼓楼・賛美労働など）、歴史事件歌（侗族歴史上の重大な事件を歌う）、世態人情歌（父母に対するの感恩歌・姑嫁が対立しないことを願う家族和睦の歌など）、情歌（恋愛歌）、叙事歌である。この本は三江侗族自治县内で普及しており、地元の人はこの本を見ればすぐに侗歌を歌うことができる。しかし、侗族北部方言区の人々はこの本だけでは歌うことはできない。

1993年岳麓書社から出版された湖南省少数民族古籍弁公室編『琵琶歌選』では、琵琶歌が演奏（唱）の順番に基づいて記録されている。まず琵琶歌の 開場歌（始めの歌）、民族起源歌、歴史人物歌、地方結盟歌（団結の歌）、勤勉労働の歌、伝説叙事歌、情歌、収場歌（終わりの歌）となっている。この本も標準中国語による漢字表記で、歌詞だけが収録されている。1998年筆者はフィールドワークのため、湖南省通道侗族自治县に赴き、『琵琶歌選』の収集編集整理を行った楊錫氏と面談する機会を得た。収集した侗族琵琶歌は全て1963年から1965年までのもので、湖南省通道侗族自治县で採録したものだということであった。しかし、楊錫氏（1939年生まれ）は当時の歌い手の年齢を全て聞いておらず、漢字表記の侗音もない。侗族である楊錫氏は侗文を用いることに熱心で、1988年湖南省通道侗族自治县でフィールドワークを行った時にも侗文使用を提唱し、それに伴い侗文を学ぶ学生もいた。『琵琶歌選』の付録には一曲だけ侗文で記録された琵琶歌もある。そ

れ以外にも、中国民間文芸研究会貴州省分会内部で編纂された『民間文学資料』の分冊にも侗族琵琶歌がある。1985年6月に貴州人民出版社から出版された『貴州侗族音楽』は貴州省侗族音楽のジャンルを紹介し、侗族大歌と侗族琵琶歌を紹介している。筆者は1998年『貴州侗族音楽』の著者である鄭寒風氏に会う機会を得たが、鄭氏によると彼の資料はほとんどが1950年代のものであるということであった。本の中には数字譜もあり、表紙は侗族の娘が琵琶歌を演唱（奏）している写真もある。漢族である鄭氏は長い間少数民族地区で生活しており、簡単な侗族の言葉も話せる。残念ながらその時鄭氏は身体状態が思わしくなく、再度フィールドワークを行うための条件が整っていなかった。さらに研究経費の面でも苦しいものがあり、フィールドワークの継続は無理とのことであった。

1994年10月に中国 ISBN 中心から出版された『中国民間歌曲集成』湖南巻（上、下）は、中華人民共和国文化部・中華人民共和国国家民族事務委員会と中国音楽協会が共同で行った「国家重点科学研究項目」である。この本は湖南省における代表的な民歌を全て収集している。漢族・土家族・苗族・瑶族・侗族の民歌は分類に記載されており、侗族の民歌は79曲が収録されている。この中の62曲は通道侗族自治县のものであり、15曲は新晃侗族自治县のもの、2曲は靖州苗族侗族自治县のものである。楽譜は数字譜で、歌詞は全て漢文と侗文で記録されている。しかし、琵琶歌は2曲だけである。筆者は子供の頃（1968年から1971年まで）通道侗族自治县で3年間生活したことがあるが、その時は通道侗族自治县で大歌を一度も聞いたことがなかった。1988年のフィールドワークの時も大歌は耳にしなかった。1997年・1998年の夏、フィールドワークのため通道侗族自治县を訪れ、その際に通道侗族自治县に大歌があるのかどうか尋ねてみた。県文化局の幹部と村の歌い手は共に、我々は大歌を歌わないと答えた。この本にも侗族大歌は一曲も記録されていない。侗族民歌の編集整理の責任者は趙洪滔氏である。

同じ『中国民間歌曲集成』貴州巻（上、下）は1995年12月に中国 ISBN 中心から出版された。貴州省の侗族人口は全国侗族人口の55%を占める。貴州省の侗族は大歌を歌い、琵琶歌も歌う。この本に収集されている侗族の歌は316曲、大歌は79曲、琵琶歌は9曲である。楽譜はいずれも数字譜で、歌詞は漢文と侗文で記録されている。この本は重要な本であるが、残念なことに全て数字譜が用いられており、五線譜は使われていなかった。1997年7月貴州民族出版社から出版された張勇氏編集の『侗族曲芸音楽』は、侗族琵琶歌に関する最初の本である。全部で63曲が収集されており、この中に琵琶歌は36曲ある。1939年貴州省榕江県侗家に生まれた張勇氏は、1958年師範専門学校卒業後、教師を経て文化局の職員となり、漢語侗語とも話せ、表記もできる。1997年夏筆者は張勇氏に会う機会を得たが、聞いてみると張勇氏は長年侗族の村を訪ねてそこで生活し、侗族の歌い手の友人もたくさんいると言う。張勇氏は豊富な経験を有し、論文（漢文）もある尊敬すべき研究者である。ただ残念なことに、張勇氏の採録された歌い手の年齢記録には生年月日が書かれておらず、「青年歌手」、「中年歌手」、「老年歌手」という書き方になっている。筆者は「青年歌手」とされている人々を何人か訪ねてみて驚いた。なぜならその方々は50歳前後だったからである。侗族地区においては50代を「青年」と言わない。

現在の中国経済は発展中で、これからさらに文化の研究も進んで行くことであろう。中国には56

の民族があり、少数民族文化の研究はこれからさらに幅広く行われることであろう。すでに中国少数民族音楽学会が継続的に活動しており、近年には侗壮音楽学会も成立し活動を始めている。

五、これまでの研究の概観と今後の展開

最後に、筆者のこれまでの侗族音楽文化研究の概要を述べ、今後の研究の展開に向けたまとめとしておきたい。侗族琵琶歌は口伝心受で伝承された音楽である。筆者は大学時代（1986～1991年）に音楽学の方法論を学んだ。自分にとって有利な点は、子供の頃（1968～1971年）侗族地区で生活した経験があることである。その間筆者は侗族の風土と人情から大きな影響を受けた。1988年前後音楽学の学生として侗族地区に赴き、侗族琵琶歌のフィールドワークを行った。フィールドワークを行う際には音楽学の方法を用い、侗族琵琶歌に対して総合的な考察を試みた。すなわち、いくつかの琵琶歌の音楽だけを分析するだけではなく、琵琶歌が侗族の人々の生活の中でどのような社会的機能を果たしているかということを重視しながら調査を行ったのである。1992年6月に留学生として来日し、日本の研究者の方法を学んだ。最初は東川清一教授の指導を受けて、修士課程においては音楽美学者の足立美比古教授の指導を受けて、文献資料中心に学んだ。1996年4月から博士課程に入り、音楽学者山口修氏の指導を受け、フィールドワークの方法論を中心に学び、1997年と1998年の夏に再び侗族地区でフィールドワークを行い、侗族琵琶歌に対して、文化的な考察を試みた。

「文化」とは一体何だろうか。人間が集団で生活している限り、その規模の大小を問わず文化は形成される。侗族の場合は文字を持たないため、自民族の歴史に関する知識から、生活に必要な知識に至るまで全て口伝の形式で伝承され、この中で琵琶歌は大きな役割を果たしている。筆者の侗族琵琶歌の研究は、単に琵琶歌の研究のみではなく、侗族の文化を研究し、侗族琵琶歌が侗族の人々の文化生活の中でどんな役割を果たしてきたかを研究目的としている。

研究方法については、フィールドワークを中心に、文献資料を参照しつつ行った。大学時代（中国北京中国音楽学院）に読んだ山口氏の論文の研究方法を用い、侗族地区でフィールドワークを行った。留学後、特に1996年以後直接山口氏の指導を受け、研究方法への理解は次第に深まった。1997年の夏休みを利用して、一ヶ月間侗族南部方言区でフィールドワークを行い、特に琵琶歌を中心に調査を行い、侗族南部方言区の文化生活について考察した。1998年の夏には湖南省通道侗族自治县で調査を行った。30年前、筆者はこの県で3年間を過ごしたが、その時に得た印象と記憶に基づき、同時に日本で学んだ研究方法を用い、侗族文化を全面的に調査し、琵琶歌の歌い手を訪ね、侗族の村で生活を体験した。こうしたことを通じて蓄積したデータをまとめ、今後あらためて報告したいと考えている。

参考文献

見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂 1994

石川栄吉等編『文化人類学事典』弘文堂 1987

山口修・生郷昭等編『岩波講座日本の音楽・アジアの音楽』3「伝播と変容」岩波書店 1988

山口修・生郷昭著「音楽の伝播と変容」(前掲『岩波講座日本の音楽・アジアの音楽』3所収)

[記]

本研究所の元準所員で、現浙江音楽学院音楽学系教授の薛羅軍氏は、同学院赴任後も氏が日本で行っておられた中国少数民族音楽文化の研究を精力的に継続しておられる。このたび日本での民族音楽研究の方法論を踏まえ、中国における民族音楽研究の現状と今後の展開についてご寄稿をお願いした次第である。(明木茂夫)